

Kwansei Gakuin University Research Center for Christianity and Culture

RCC Newsletter

発行：関西学院大学 キリスト教と文化研究センター

https://www.kwansei.ac.jp/c_rcc/ TEL:0798-54-6019

■現代社会の課題を多角的にとらえ、 いのちの尊厳の回復を目指す研究センターとして

RCCセンター長 梶原 直美

関西学院大学キリスト教と文化研究センター（RCC）は、一九九七年四月の発足から二〇二五年四月に到る二八年のあいだ、生きるプロセスで生じる様々な思想や現象、世界の在り方など、人間を取り巻く幅広い対象に焦点を当てた学術的な研究をおこなってきました。この探究は、建学の精神に依って立つ関西学院としての課題意識のもと、現代という文脈のなかで展開されています。そしてその成果は、紀要や書籍の出版によって広く公開されています。この六月には、昨年度までの研究プロジェクトのひとつの実りを『戦争の記憶と想起―平和への警告とその継承』という書籍で刊行することとなりました。皆さまに広くお読みいただけましたら幸いです。

今年度、本研究センターでは二つの研究プロジェクトを立ち上げました。一つ目のテーマは、柳澤田実主任研究員（神学部）が代表を務める「クリスチャン・シオニズムに関する思想的探究」です。

「シオニズム」とは、ユダヤ

教の聖地エルサレムにあるシオンの丘に由来します。一般にシオニズムとは、この地を含むパレスティナ地方を神からの約束の地と理解し、ここにユダヤ人国家を築こうとする思想および運動のことを指します。旧約聖書の時代から迫害を体験してきたユダヤ人は、自らの国家を持たず、離散の民として世界各地に居住していましたが、それ以降も反ユダヤ主義のもとで排斥され、一九世紀、二〇世紀にも大規模な迫害を受けることとなりました。この出来事や世界情勢の影響によってシオニズムはいっそう高まり、英国の参与などによりパレスティナにユダヤ人国家が建設されました。しかし、このことはそこに居住していたアラブ人から生活の場を奪い、その土地をめぐる問題を生じさせる結果となりました。これによって新たな紛争が生じ、現在の深刻な社会問題に発展しました。日本でもこのニュースを目にしない日はありません。

ただ、ユダヤ人のなかにはユダヤ教の理解や人権思想から

シオニズムに異を唱える人々が一定数存在し、他方、キリスト教のなかにはこのシオニズムを肯定する人々がいます。本研究プロジェクトでは、ユダヤ教およびキリスト教の信仰や思想、文化との接点が欧米ほど強くない日本の研究こそが率直な評価をなし得るものと考えて、クリスチャン・シオニズムを研究のテーマとしています。

そして二つ目には、継続的な研究プロジェクトとして、梶原（教育学部）が代表を務める「キリスト教主義教育の可能性と実践―well-beingを共に生きるために」を設定しました。「well-being」という語は、幸福、福祉、満たされた状態を意味しますが、一九四六年、WHOによって健康の定義のなかに使用されて以来、この語に対する関心が世界規模で高まり、医療福祉のほか、教育、経済、自己啓発といった分野でもその重要性が認知されるようになりました。他方では、様々ないのちの尊厳が奪われる現実のなかで「共生」に関する重要性が認識され、研究や試みが展開されています。

本研究プロジェクトでは、お互いに様々な異質性を持ちながら他者と共に平和的に存在することを探究します。ここで言う他者とは人間だけでなく、

動物、動植物やその他の生き物、水や地球といった、人間が生きるなかで出会う様々ないのちある存在を指しています。旧約聖書によると、人間も含め、すべてのいのちの根源は神に置かれています。現在、これまでの人間の所業により多くのいのちが傷つき、痛みを抱えています。わたしたちは神との関係のなかで、他者とのように関わり得るのか、それが本研究の関心事です。well-beingを独占的ないし自己完結的に生きるのではなく、また、差別や搾取の犠牲者が仲間と共にひっそりと生きることを肯定するのでもなく、個人的かつ社会的にwell-beingな状態としての生を場を異なる他者と分かち合い、共に生きることを目指して研究を進めたいと思っています。

これらの研究を進めるなかで、今年度もまた、学外から講師を招いて公開研究会や講演会の開催を予定しています。共によりよい現実の在り方を考えたいと思いますので、多くの皆様にご参加いただき、率直なご意見をいただけましたら幸いです。これまで同様、研究員一同で真摯に研究に取り組んでまいりますので、今後ともキリスト教と文化研究センターをどうぞよろしくお願ひいたします。

研究プロジェクト報告

■研究プロジェクト

クリスチャン・シオニズムに関する思想史的研究

この研究プロジェクトは、クリスチャン・シオニズム、またそれと深く関係する千年王国主義の起源と発展の経緯を、聖書学、神学、哲学のなかに探るものである。聖書の記述がどのような解釈や伝承を経て一九世紀のシオニズムに結実し、現代のシオニズムに継承されているのか、またクリスチャン・シオニズムを形成しているのかを思想的に検証する。その上で、今日のクリスチャン・シオニズムに対して、学術的観点から具体的な提言をすることを目指している。

プロジェクトメンバーは、新約聖書を専門とする東よしみ副センター長、同じく新約聖書を専門とする木原桂二研究員、筆者に加え、哲学を専門とする本学文学部の原田雅樹教授が分担者として参加することとなった。原田教授はこれまでにパレスチナ・

イスラエル問題について複数の哲学的論考を著し、この問題についての啓蒙活動にも関わっている。二年間で完遂するにはあまりにも大きな研究課題ではあるが、まずは土台となるべき議論を構築したいと考えている。

現在のイスラエル・パレスチナ問題の背景にあるシオニズムについては、実は数的にはユダヤ人以上に、キリスト教徒たちが支持しているという現状がある。キリスト教シオニズムは、キリスト教の文脈において、ユダヤ民族の聖地への帰還を主張する政治的・宗教的イデオロギーだ。このイデオロギーは、一九四八年のイスラエル国家の建国が、旧約聖書を通じて伝えられた聖書の予言に符合するものとして主張している。そしてこの約束の地でのイスラエルの民の帰還は、イエス・キリストの

再臨の必要条件であると考えられている。キリスト教徒による、ユダヤ人の約束の地への帰還への期待は、一七世紀のイギリスの清教徒の思想に根ざしていると言われている。要するにシオニズムは、ユダヤ人から内的発的に生まれたのではなく、キリスト教徒が生み出した思想なのだ。

歴史家の Anita Shapira によれば、イギリスの福音派プロテスタントがこの概念をユダヤ人社会に伝えたのは一八四〇年代ごろだとされている。当時のユダヤ人たちは必ずしもこの思想を歓迎しなかったという報告があり、現在も、特に米国のユダヤ人たちの多くはシオニズムを支持していない。もはやイスラエル・パレスチナ双方によつては解決できないほど憎悪や悲しみが積み重なっている状況を考えると、これだけの惨禍を生み出した発想の元を検証することは、キリスト教徒としての責務であると筆者は考えている。

シオニズムを支持するクリスチャンたちにとって根拠となるのが先述の千年王国主義という終末論とこの千年王国説をもとにアメリカで生まれたデイスペンサーシヨナリズム

ムだ。千年王国主義とは、『ヨハネの黙示録』二〇章をもとに、終末にあたりイエス・キリストによる直接統治の千年が始まることを信じる思想である。この千年王国の考え方を精緻に体系化したのがデイスペンサーシヨナリズムだが、即座には理解できないほど細分化され、解釈も分かれている。

現在、シオニズムを支持するキリスト教徒と言うと、デイスペンサーシヨナリズムを信奉するキリスト教右派として米国の福音派が取り上げられることが多いが、福音派以外のプロテスタント信者やカトリック信者にもシオニズムを支持する人たちは存在しており、問題は単純ではない。日本でも二十世紀初頭の著名なキリスト教徒である無教会派の内村鑑三や矢内原忠雄がシオニズムを支持していたことはよく知られている。他方で現在、筆者が実地調査した範囲では、日本のペンテコステ系教会には、デイスペンサーシヨナリズムを歴史化、相対化し、そこから距離を取ろうとする努力も見られる。

クリスチャン・シオニズムと深い関係を持つ千年王国主義、そしてその影響下でア

メリカで始まったデイスペンサーシヨナリズムについては、欧米でも最近研究が進んでおり、特に二〇一三年に出版された Daniel Hummel の『The Rise and Fall of Dispensationalism』(Eerdmans Pub Co.) は客観的な視点で米国でのデイスペンサーシヨナリズムの盛衰を分析し、高く評価されている。この本以外にも、ここ数年、福音派の内部からより学術的にこの問題を検討する動きも見られる。

このような自浄作用的な動きを歓迎すべきなのは言うまでもないが、欧米では反ユダヤ主義への忌避感からクリスチャン・シオニズムの問題を真正面から扱うことが困難だという現状もある。それゆえクリスチャン・シオニズムに関する客観的な研究は、私たちがのように西欧のユダヤ人差別の歴史を共有しない非西欧圏の学者こそ担うのに適しているのではないかと筆者は考えている。本プロジェクトでは、この問題に関係する歴史家や神学者を招聘し、公開研究会や学術講演会を複数開催するので、ぜひとも多くの皆さんとの困難な問題について率直に議論できることを願っている。(報告者 主任研究員 柳澤 田実)

■研究プロジェクト

キリスト教主義教育の可能性と実践――

well-beingを共に生きるために

二〇二五年という今は、どのような時代でしょうか。わたしたちは今日も様々な技術の進歩による恩恵を受け、快適さや便利さを享受しながら日々を過ごしています。先人たちの時代から、わたしたち人間はこれまで「豊かさ」を求め、幸せを願い、自己実現を目指してきました。けれども、たとえば他者に関心を寄せず自身にのみ利益や所有を獲得しようとするなら、他者は同じ時代に同じ世界で共に生きる同胞というよりも、しばしば利益を争う戦いと排除の対象となるのではないでしょうか。

旧約聖書によれば、人間も含め、世界のいのちある存在は神のことばによって生まれました。「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった」（創世記一・三二）と語られています。「極めて良かった」とは善悪の評価ではなく、美、喜び、そして神の祝福を意味すると考えられます。それらの生物は、調和のもとで生きて

いました。

けれども現在までにその調和は崩れ、とりわけ人間は自己の利益を過剰に追求しすぎるあまり、様々なかたちで命を与え養ってくれる環境や動植物をも無尽蔵に貪り続け、長い時間をかけて傷つけ、損なってきました。こうして、いのちある存在を危機に陥れてきました。

わたしたちは、人間にかぎらず、他者どうし関わり、いかにあるべきなのでしょう。優越的立場に憧れ、搾取と競争に依存する構造のなかに生きるのはなく、他者と調和的に生き、互いの生に喜びをもたらし生き方はできないのでしょうか。

環境破壊が著しく進んだ近年、地球上の生命体に対する反省がなされるようになりました。たとえば国連は、二〇一五年に採択したSDGsにより、このような事実に対して、世界規模で正面から向き合おうとする意志を示しました。ここには一七項目の目標が掲げられ、目標ごとに到達課題

が計一六九項目挙げられています。そのなかに、「well-being」という視点が含まれ、「すべての人に健康とwell-beingを」という目標が据えられています。「well-being」とは、遡って一九四六年、WHOが健康の定義として「病気でないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた（well-being）状態」（日本WHO協会訳）と言及したことにより、広く注目されるようになりました。

WHOはSDGsについても言及しています。二〇二一年、WHOが発行した『ヘルスプロモーション用語集』のなかで、一九八六年の初版以来含まれていなかったSDGsと



well-beingの項目が新たに加えられました。ここでのwell-beingとは、生活の質（QOL）だけでなく、人々やその社会が意味や目的意識にしたがつて世界に貢献する能力も含むものとして説明されています。それは、個人のみが満たされ、享受することによしとする受動的な幸福ではありません。

わたしたちは、世界規模でなされる努力に並行して、自らの個人的な姿勢を再検討しなければならぬことを痛感します。本プロジェクトは、特定の誰かだけでなく、存在する人、生物、環境それぞれがともにいのちを息づかせるwell-being、すなわちよいあり方、祝福されたあり方を生きたために、何が必要なのか、そのために何が可能なのかについて探究します。

その探究の根底には、キリスト教主義学校の持つ可能性と実践への問いが据えられています。関西学院はキリスト教主義学校として、イエスが示した愛にみられる奉仕を重んじています。それは競争的ではなく共同的であり、奪い取ることでなく与えることを幸いとする生き方です。ここにこそ喜びがあると聖書は教えています。ですから、本研

究プロジェクトの探究は、キリスト教主義学校で学ぶ生徒・学生たちが世界市民の一員として互いの存在を重んじ、いのちを喜ぶ生き方を模索できるようにと願い、現代のなかでのちある存在を尊重し、共に喜びをもって生きるあり方の提案を目指します。

このプロジェクトでは、今年度、well-beingや共生に関する基本的な資料や文献購読あるいはフィールドワークなどをとおして各研究員の認識と問いを深め、研究の方向性を定めます。並行して、公開研究会および講演会を予定しています。公開研究会は春学期におこない、牛田匡氏（社会福祉法人日本コイノニア福祉会理事長・チャプレン、日本基督教団久宝教会牧師）を招いて「キリスト教社会福祉施設における取り組み―社会福祉法人日本コイノニア福祉会の事例から―」というテーマでお話しいただきます。

なお、今年度は『建学の精神考』の出版年でもあります。本学院内の建学の精神に関わる様々な刊行物における言説からあらためて建学の精神に関する意思を確認し、刊行物として発信する予定です。（報告者 センター長 梶原直美）

新刊紹介 『戦争と記憶の想起 — 平和への警告とその継承』キリスト新聞社

小田部 進一



本書は、関西学院大学キリスト教と文化センター（略称「RCC」）で二〇二三年度から二年間にわたり行われたプロジェクト「戦争の記憶と想起 — 平和への警告とその継承」の成果をまとめたものです。本書は八つの論考から構成されています。前半は本学の五人のRCC研究員による論考です。テーマは、ハンブルクの「警告碑聖ニコライ」成立過程と想起文化の様式（小田部進一神学部教授、証言に基づく「沖縄戦の図」を展示する佐喜眞美術館の役割（梶原直美教育学部教授・宗教主事）、ルワンダにおけるジェノサイドとスイスの宗教改革時代における迫害の歴史と和解のプロセス（アンドレアス・ルスターホルツ文学部教授・宗教主事）、戦中・戦後の日本の賛美歌とその変

遷（水野隆一神学部教授）、終戦直後のドイツにおける「シュトゥットガルト罪責宣言」成立とエキュメニカルな和解のプロセス（橋本祐樹神学部准教授）と多岐にわたっています。後半の三つの論考は、関西学院高等部（西室雅史教諭）及び被爆の歴史がある広島女学院（前田美和子人文学部准教授）と長崎の鎮西学院（鐵口宗久総宗教主事）からの三人のゲストスピーカーによる、キリスト教主義学校における平和学習と「戦争の記憶と想起」に関する論考です。

RCCは、「さまざまな価値観、異質な文化が衝突する現代社会に欠かせない、新しい『知』の枠組みを提供する」とことを目的の一つとしています。終戦から八〇年を迎える年に本書を出版することが、和解と平和の構築を目指して「戦争の記憶と想起」について考え、さらなる議論が深められるための端緒になり、また平和学習や平和構築の実践のための何らかのヒントを提供するものとなることを願います。（報告者神学部教授小田部進一）

■キリスト教と文化シリーズ（1） カインと人種差別



Mariotto Albertinelli, カインとアベルの捧げ物, 1510年頃
© Harvard Art Museums/Fogg Museum

カインの供え物の煙は天に上がらない絵もある

「主はアベルとその供え物に目を留められたが、カインとその供え物には目を留められなかった」（創世記四章四節―五節）
カインとアベルが祭壇を築き、主に供え物をする絵に、右記の神の反応を盛り込むことがよくある。雲の中から神の手がアベルを指すか、あるいは神がアベルの方を見ているかというような工夫が見られる。後者の場合、カインの供え物が無視されたことをはっきりさせるために、手で目を覆う神の顔をもう一つ付け加えることもある。

また、煙を利用することもある。創世記八章二二節に記されているように、神はノアの捧げ物から上がった有味の香りを嗅いだ。それを受けて、アベルの供え物から煙が空に向かって垂直に上がるが、カインの供え物の煙は天に上がらない絵もある。この絵を描いたアルベルティネッリが利用したもう一つの工夫も一六世紀にはもはや新しいものではなかった。それは、雲から炎が現れ、アベルの供え物に火をつけたモチーフだ（レビ記一〇章二節を参照）。

しかしこの絵の特徴は、カインの供え物から出る煙が彼の顔に当たり、その顔は黒く変色することにある。しかも顔の色だけでなく、全身の肌が黒くなっている。それも新しいモチーフではなく、六世紀頃にできたアルメニア語のアダム物語に由来し、創世記五章四節の誤訳だった。自分の供え物が無視されたことにカインが気づくと、とたんにその顔が黒くなったと言う。この話は様々な形で広まり、後に黒人に対する人種差別を正当化するためにも利用された。

（報告者主任研究員

Andreas Rusterholz）